

信仰生活に息づく崇敬対象だとする暫定的結論からさらに踏み込んだピサヤの宗教生活の内在的論理の描出が、より説得力を増してなされるはずである。

この「内側からの視点」という点に関連して、あえてもうひとつ疑問を提示しておきたい。第2章でとりあげたバリタワックの聖母は、R・イレートの *Pasyon and Revolution* (邦訳題名『キリスト受難詩と革命』[イレート 2005]) の表紙デザインに用いられていることからわかる通り、フィリピン革命の象徴的なエピソードとしてあまりにも有名である。ただし本書では、民衆の観念において宗教的なものと政治的なものが一体化していたという「下からの歴史」的な説明にはあまり同調せず、むしろ「無知な一般民衆」に対する「寓意の象徴体系を理解する政治家や芸術家」という対比でフランス革命におけるマリアンヌを意義づけたM・アギユロンの議論を援用して (p. 120)、合理的で近代主義的なイサベロ・デ=ロス=レイエスに知識人としての啓蒙的役割を見出している。このような論調は、合理的かつ先進的な要因をより重視する近年のフィリピン革命研究の傾向を反映したものかもしれないが、少なくとも上記のように考える根拠としての史資料を示すことは必要であろう。それなしに、「イサベロ・デ=ロス=レイエスが、フランスのマリアンヌなど西洋の事例を知っていて意識的・無意識的に参考にしたかどうかはわからない」(p. 119) という仮説のままできとどめている点にはもの足りなさを覚えた(この点は、第3章の《褐色の聖母》の加筆の可能性とともに、いずれも新たな資料発掘による仮説の検証は「今後の課題」だと著者自身も終章で述べているが)。なおイサベロ・デ=ロス=レイエスについては、フィリピン独立教会の教義を合理主義的に体系化したり労働運動を近代的に組織したりした側面が強調されがちであるが、*El Folk-lore Filipino* (直近の英訳版として、[de los Reyes 2010]) を刊行するなど、民間伝承の収集編纂などにも功績があったことを考慮する必要はないだろうか。

このような疑問や引っかかりは、キリスト教の聖像や聖画という豊饒な素材、および文化人類学と美術史の邂逅という大きな主題に接した知的興

奮ゆえの勇み足のなせるわざかもしれない。今後、新たに発掘される史資料をともなった実証的な議論がなされるとともに、本書のような新たなアプローチによって文化人類学的アート研究(聖画像のようなもの研究)が今後いっそうさかんになることを期待したい。

(川田牧人・成城大学文芸学部)

参考文献

- イレート, レイナルド・C. 2005. 『キリスト受難詩と革命——1840～1910年のフィリピン民衆運動』清水展;永野善子(監修), 川田牧人;宮脇聡史;高野邦夫(訳). 東京:法政大学出版局。(原著 Iletto, Reynaldo Clemeña. [1979] 2003. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*. 6th ed. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.)
- 喜多崎 親(編). 2018. 『〈祈ること〉と〈見ること〉——キリスト教の聖像をめぐる文化人類学と美術史の対話』東京:三元社.
- de los Reyes, Isabelo. 2010. *El Folk-lore Filipino*. Salud Dizon and Maria Elinora Peralta-Imson (trans.) Quezon City: University of the Philippines Press.

北澤直宏. 『ベトナムのカオダイ教——新宗教と20世紀の政教関係』風響社, 2021, 258+16p.

ベトナム研究において宗教は鬼門である。なぜなら共産党一党体制の同国で外国人研究者が宗教に関する現地長期調査を実施することは、情勢に応じて緩和されるものの、基本的には許可が下りないのが現状だからだ。しかしだからこそ、ベトナムの宗教世界は研究者を魅了し、90年代以降は人類学や地域研究の視点から多くの研究報告が世に送り出されてきたのも事実である。なかでも本書が取り上げるカオダイ教は、日本人が研究をリードしてきたといっても過言ではない。その中であって、本書が他の研究を大きく凌駕するのは、著者が南ベトナム時代の歴代の政府行政機関とカ

オダイ教団のベトナム語内部文書を多数入手し、その分析から政教関係史を読み解こうとした点である。すなわち本書は、宗教を主題にすえつつ、それを政治史として扱うことで、南ベトナム時代の政教史の解明に挑戦した意欲作と言える。以下では、まえがきとあとがきを除き、序章、終章を含む6章構成からなる本書の内容を要約していくが、その前にカオダイ教について簡単に触れておきたい。

カオダイ教は、仏領下コーチシナにおいて生じたベトナムの宗教である。降霊術サークルが元となり、1926年にカンボジアと国境を接するタイニン省にて教団が創設されると、多くの農民や労働者の中で信仰が広まり、急速な発展を遂げている。正式名称は「大道三期普度」といい、世界宗教による第一期、第二期に次ぐ第三期の人類救済として至高神カオダイ＝玉皇上帝がベトナムに降臨したとされる。その特徴は教団運営のすべてが扶乩を通じたご神託によって決められてきた点、またファム・コン・タックというカリスマの存在が教団の求心力となってきた点だが、教団の全体像の把握は難しいと著者は語る。

本書、序章によると、ベトナム南部では北中部とは異なる「折衷主義」の社会・文化が構築されてきた (p. 17)。そしてその最たるものが宗教であり、カオダイ教であった。ゆえにカオダイ教は「南部社会を理解する上で、極めて重要な存在」なのだと言著者は主張する (p. 18)。そして南北分断期の「北」が宗教活動を制限したのに対し、「南」では一定の自律性を宗教に与えたため宗教主導による政治・社会運動が活発化し、政府との衝突も多発していったのだという。こうした宗教組織の台頭は、歴代の南部政権に影響を及ぼし続けるが、南北が統一し社会主義国家が建国されると、いずれの宗教も改造が求められ、政府によって公認された組織のみが「宗教団体」として活動を許されていった。ゆえに現共産党政権の意向が反映される「ベトナムの歴史」では、南部の政治史の深部に関わってきたはずのカオダイ教や各宗教が語られることは、これまでなかったのである。

以上をふまえて第一章では、ベトナム共和国第一共和政期 (1954-63) における政教関係が述べら

れる。この間のカオダイ教は「共和国の求める近代的宗教観への適応を余儀なくされた」 (p. 78) という。それはなぜか。政府にとって、タイニン省一帯を掌握していた教団は政治的不穏分子に他ならなかった。そのため政府は、具体的な宗教政策こそ示さなかったものの、省内の行政改革を実施し、教団が管理する行政権、徴税権、軍事権を政府行政に移譲させることで政教分離を図っていく (p. 62)。結果的に教団による自治国家運営は終焉を迎える。他方で教団は、親仏派と反仏派の混在や、宗教指導者と軍事指導者の対立などで内部の統制が取れず、カリスマ指導者タックはカンボジアへの亡命を余儀なくされる。強力な求心力を失った教団はその後、政府寄りの宗教観をもつ新代表のもと体制の再編を図り、政治色が一掃される。ただし政府による教団の既得権益の剥奪は教団内での反体制派の醸成を促し、共産党陣営へと与する者を生みだしていくのであった。

第二章では、ベトナム共和国軍事政権期 (1963-67) における政教関係が述べられる。この間の政府は内部の権力闘争が忙しく、国政は後回しとなっていた。この政策不在を利用して各宗教組織は利権拡大を政府に要求していく。その中でカオダイ教団は、政治家や公務員などの社会的地位のある人物を組織内で登用し世俗権力との結びつきを強める一方、亡きタックのカリスマ性を再利用し教団内の不和を解消することで内部統制を図りながら、1965年には正式に法人化され、合法的な土地所有が認められていく (p. 90)。ただしその実情は、以前から続く内部派閥の対立が深刻化し、教団内秩序の維持すらも危うい状況であったのだという。それにもかかわらず各宗教組織の管理が難しくなる軍政下では、仏教主導で、かつ他の宗教信者の支持も集めた民主化運動が中部地域で生じてしまう。それが国政選挙の実施と民政移管に拍車をかけ、1967年の第二共和政樹立へと至るのであった。

第三章では、第二共和政期 (1967-75) における政教関係が述べられる。米軍が撤退し、南ベトナムの治安が悪化する中で、この政権でも具体的な宗教政策は示されず、宗教問題は後回しにされていった。情勢不安から政府批判が高まる一方、政

府は厚い信者層を抱える各宗教組織と「良好な」関係を維持することで反政府デモの抑止力とし、社会事業を促進させていた。各宗教は政府の恩恵を受けつつ、なかでもカオダイ教団はホアハオ教と協力し、独自の大学設立や祝日の制定などの要望を政府に提出するなど、その権利を主張していったのだという (p. 120)。他方で戦況は徐々に北ベトナムが優勢となり、教団のあるタイニン省は共産勢力の最重要拠点として労働党による宗教工作も着実に進められていた。そのネットワークは教団内部でも広がりつつあったが、ここでは共産党勢力への支持者はさほど拡大していなかったことが指摘される (p. 137)。

第四章では、ベトナム戦争後の社会主義体制下 (1975-) における宗教管理体制とカオダイ教団の対応が述べられていく。当初からカオダイ教団を敵視した共産党政府は、77年から80年代にかけて徹底した宗教改造を実施した。政府は教団を「宗教の皮をかぶった政治組織」(p. 146) として糾弾しながら反体制的な聖職者を逮捕し、また教団所有の学校や病院など関連施設を接収して、様々な要素を「純粋な宗教」ではないと排除していったのだという。これに対して教団はカオダイ令01を発し、自発的に教団を解散せざるを得ない状況まで追い込まれていく (p. 152)。その後1990年代以降になると、ドイモイ後の社会変化や宗教弾圧を非難する諸外国への対策をふまえ、政府は宗教管理の方向を転換する。それが公認宗教団体制度であった。政府は各宗教を公認化し、儀礼や社会活動の権利を与える代わりに政府寄りの幹部を独自に養成させ、政府の意図に沿う運営のための人材育成を通じた宗教団体懐柔を進めたのであった。そしてその方針は今日に至るまで継続されているのである。

終章にて著者は、カオダイ教団内で繰り返された内部紛争と国家権力の関わり、そしてベトナムにおける政治と宗教について改めて問い直しながら、この混沌とした状況と世俗権力との結びつきこそがカオダイ教団を生き残らせてきた要因であると結論付ける。

実は評者もカオダイ教を対象に研究している。

ただし研究の視点は異なり、図らずも著者が批判する「信者個人の語り」に着目し、日常の実践としてのカオダイ教信仰を問う人類学的視点に基づく。すなわち著者がここで示す宗教 vs. 政治といった二項対立的議論ではなく、ローカルな実践と関係性の変化の中で生起する宗教や政治を問う立場をとっている。それをふまえた上で、以下では、評者が本書を通読し感じたふたつの違和感を述べていきたい。第一に「カオダイ教団」とは誰を指すのかという点である。本書からは、そのアクターが教団を支配する一部幹部たちや歴代の情勢に感化された急進的かつ原理主義的信者たちであるように捉えられるが、他方でその他大勢の何十万人の一般信者たちの信仰生活史については一切触れていない。果たして彼らも本書で描かれるようなマクロな政治の様相一色に染められていたのだろうか。仮にそうではないとしたら、日々の生活を編成する信仰の場として教団に属する人々は、この混沌とした時代をどのように生きていたのだろうか。本書ではこの一般信者が不在の状況にもかかわらず「カオダイ教団」として一枚岩的に語られていることが残念でならない。そしてこの点は次に示す第二の違和感にも関連してくる。本書では、「カオダイ教団は政治組織である」という言及が幾度も繰り返される。しかし果たして一般信者たちも教団を「政治組織」と認識していたのだろうか。また、そもそも彼らは教団の活動を「聖」と「俗」などと明確に区分していたのだろうか。この点についての言及も本書ではなされていない。加えて、著者が資料分析の域を超え、個人の意見として教団を政治組織と断定しているように伺える点にも疑問が残る。

この違和感の根底には、宗教・政治・組織・国家・聖・俗といった本書にとって極めて重要な概念が学問的に検討されることなく、またそれらに対する著者の学問的スタンスが明示されることもなく、ベトナムという社会的コンテクストのみでこれらが検討されてしまっているが故の議論の悪循環がある。本来は、序章でその道筋がある程度示されるべきであり、それにこたえる形で結論が導き出されれば、本論での議論の混乱は避けられたように思う。加えて、著者が調査期間中に見聞

したはずの信者の複数の語りや行為を、本書の記述からは排除してしまったことで、本来はそれを通じて形成されたであろう著者の意見が否定的にひとり歩きしてしまい、それぞれの言及が分析の結果なのか、はたまた著者の個人的な意見なのか、読者を困惑させる原因をも生みだしている。

ただし、あとがきを読むにつけ、著者は以上の問題点を自覚しているようにも感じられる。今後は、貴重な調査期間で構築した信者たちとの関係性を生かし、彼らから聞き取った「カオダイ教史」を再び描きなおしてくれることを期待したい。それをふまえた上で、著者が本書の序章で熱く語る「歴史的事実とは何か」という根本的課題に改めて立ち帰り、厚い記述としての「南部ベトナム政教史」を完成することを願う。

(伊藤まり子・JICA長期専門家／ベトナム国家大学ハノイ校一日越大学)

下條尚志、『国家の「余白」——メコンデルタ 生き残りの社会史』京都大学学術出版会、2021、xii+558p.

本書は、クメール人、華人、ベト人が混住するベトナム南部のメコンデルタにおいて、20世紀半ば以降の動乱期に地域社会の人々がとった様々な生き残り策と、その結果として再編成されたローカルな秩序のあり方を描いた社会史である。まず内容を簡単に紹介しよう。

第1章では、ベトナム南部社会をめぐって展開したモラル・エコノミー論争や南北農村比較論などの先行研究について紹介するとともに、それを乗り越える必要性が説かれる。そして、ナショナル・ヒストリーにとらわれず、混濁的な多民族社会の歴史や国家の介入しにくい空間、国境を越えた人やモノの移動に着目することの意義が論じられる。

第2章では、調査地のソクチャン省フータン社について説明される。フータン社はクメール人、華人、ベト人が混住する多民族社会であり、地域レベルでは「混血」という概念が重要である。こうした社会に生きる人々の民族帰属意識には揺れ

が見られ、「華人とクメール人の混血」を自認する人々は、上座仏教寺院のみならず大乘仏教寺院を訪れる。また民族帰属認識や登記上の民族をめぐる、自身と他者の認識に齟齬が生じている事例を紹介する。

第3章では、19世紀半ば以降のフランス植民地化がもたらした地域社会の変動について述べられる。国家の周縁部に位置するメコンデルタの地域社会は、植民地化以前から多民族的状況が存在したが、特に植民地化以降、開発によって輸出米生産が発展する過程で華人が移住し、在来の住民との通婚が進んだ。しかし脱植民地化の時期に民族間紛争が顕在化すると、「混血」者の変動性や多重性が許容されない雰囲気が一時的に生じたとする。

第4章では、南ベトナム期のメコンデルタで生じたクメール人の言語や仏教の問題について扱われる。1920年代後半から、クメール人たちは僧侶を媒介として、カンボジアの上座仏教、クメール語教育の影響を受けていた。しかし1950年代後半に南ベトナムとカンボジアとの間で国境論争が生じると、ゴー・ディン・ジエム政権は両国間の僧侶の往来を制限した。こうした変化への反応の一つが反政府運動への参加という形で現れたと論じられる。

第5章では、ベトナム戦争期において、ジエム政権と、その後のグエン・ヴァン・ティエウ政権が実施した農地・農村改革に焦点が当てられる。共産主義の拡大を警戒したジエム政権は、アメリカの政策提言や物質的支援を受けながら、理念的で画一的な農村共同体モデルを導入した。しかしそれは人々の不満を増幅させたため、ティエウ政権は零細農民の自作農化、農業の近代化を狙った改革を実施し、農村の市場経済化が促進されたことを示す。

第6章では、南ベトナム政府と南ベトナム解放民族戦線との間の戦争が及ぼした影響について述べられる。解放戦線が少数民族や上座仏教僧を介して民心の掌握を図る一方、ティエウ政権は僧侶のプノンベンへの留学を一時的に認め、カンボジアとの関係を重視するサマイ派（仏領期カンボジアで生じた仏教改革の流れを汲む「新しい」実践）の取り込みを図ったり、公立学校でのクメール語